

言語類型学と言語同盟¹

I. 基本的概念

1. 内容的言語類型学の主張

§1 言語類型学 とここでいっているのは、ロシア及び旧ソヴェト時代を通じて研究され、1950年代以降にクリモフによって集大成された、いわゆる「内容的類型学」contensive typology контенсивная типология のことを指している。

簡単にいえばこれは次のことを骨子として主張するものである。

- a. 言語は意味上の主語・述語・目的語関係のあり方によっていくつかの類型に分類することができる。
- b. この主語・述語・目的語関係は、当該言語の構造のヒエラルキーの最上層をなし、これに従って他の諸階層の構造が決定される。
- c. このようにして分類された言語類型は、他の言語類型に変化し得るが、その発展は一方向に限られ、逆行することはない²。

a. で述べている類型には、現在のところ「活格言語類型」active languages языки активного строя、「能格言語類型」ergative languages языки эргативного строя、「対格言語類型」accusative languages языки аккузативного строя が区別されている。対格言語類型には「主格言語類型」という用語を用いる人々もいるが、「活格言語」及び「能格言語」が、いずれも有標的な項の名に基づいて命名されていることからすれば、有標的な項である「対格」を用いる方が良いと思われる。

また c. で述べられているのは、活格言語は能格言語に発展し、能格言語は対格言語に発展する方向性を持つこと、この逆方向の発展はないこと、を主張するものである。ただしクリモフも認めているように、活格言語が必ずしも能格言語を経ることなく、直接に対格言語に発展する可能性もあり、印欧諸言語はまさにこの場合に当たっているとする。

それでは活格言語の前の段階は何かという問題については、たとえばバントゥー諸語に見られるような「多分類言語」class languages がこれであったのではないかとする説が有力であり、これに関連してこの種の言語の研究が盛んになりつつある。対格言語の後の段

¹これは1996年11月16日、京都大学大学院人間・環境学研究科地下会議室において行われた日本ロシア文学会関西支部総会において報告したものである。

²クリモフの所説については、[10][11][12][13]参照。

階については、未だその例が存在しないために、どのような原理に基づくものとなるのかはなお不明であって、憶測を許すのみである。

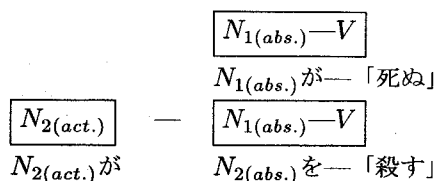
主張の b.、すなわち主語・述語・目的語関係が言語類型の基本的な関係であって、当該言語の他の階層は、この基本的原理に基づいて構造化されているということ、また同時に主張の c.、すなわち言語類型は発展し変化するということ、すなわち言語現象が一つの continuum であるということから必然的に来由するのは、一言語の種々の階層には、基本原理となる関係から論理的に導かれる諸現象(これを**包含事象** implication импликация という)とならんで、包含事象ではないが、ある言語類型にはしばしば随伴して認められる諸現象(これを**随件事象** frequentalia фреквенталия と称する)が混在するというものである。いうまでもなく、随件事象は当該言語の所属する類型の前の段階に当たる類型、もしくは後に来るべき類型の包含事象と考えられる。

2. 言語類型の内容

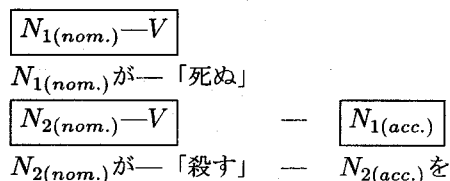
§2 **活格言語**は森羅万象を生き物であるか生き物でないかに分類することをもってその原理とする言語類型である。この種の言語では文の中心をなすのが述語であって、その述語が成立するために不可分と考えられる事象がこれに添えられる。たとえば「死ぬ」という述語が存在するとき、この述語は何らかの対象の上に「死」なる過程が生じ、やがてその過程が完成することを予定している。この対象を仮に *A* とすれば、*A* を指す名詞が「死ぬ」に添えられ、両者は緊密な結合(シンタグマ)をなす。もし「*A* が死ぬ」という事態が *A* 以外の対象、たとえば *B* の行為ないし働きかけによって生じると認定されるときには、*B* を表す名詞は、それが行為者であることを明示したうえで、先のシンタグマに添えられる。

こうしてできた二次的なシンタグマは、「*B* が *A* を殺した」と解釈される。ここで「殺した」という「行為」は、「死ぬ」という過程がそのうえに起こる対象なしには存在し得ない。しかし逆に *B* の存在は「死ぬ」という過程にとって必須のものではない。帰するところその存在は認定の問題に過ぎないのである。呪咀が有効であると信じられている文化・社会的環境においては、遠くはなれた場所において密かに呪咀を行った人物こそ、*A* を死に至らしめたその人でなければならないのである。

したがってこのような言語においては、「死ぬ」と「殺す」は同一の事態であると観念される。自動詞と他動詞の区別が存在しないのである。重要なことは、対象が生き物であるかないか、行為者と考えられるか否か、なのである。従って文法的性は「生物」、「無生物」の2種に分れ、「生物」性は「行為者」(活格)と「無規定」(絶対格)のいずれかの格を取る。「無生物」性は当然ながら「非行為者」であるから無規定の格しかもち得ない。さらに行為者が常に非行為者と区別されているから、この種の言語には「受け身」が存在し得ない。「受け身」が存在できるのは、行為者と非行為者の区別がないばあいである。この種の言語に内在的な動詞のカテゴリーは、行為動詞および生物に関する状態動詞の類と、生物に関しない、あるいは生物・無生物の区別に関与しない状態動詞の類になる。



§3 対格言語というのは、行為を受けるか否か、言い替えれば行為の「被行為者」かどうかかが問題とされる類型である。この種の言語においては、生物・無生物の別が無規定であるから、そのいずれを表す名詞も行為と結びつくことができるが、「被行為者」を明示した名詞を伴うことができるのは、ある種の述語に限られる。ここから動詞は「自動詞」と「他動詞」のカテゴリーをもつことになる。すなわち、



この種の言語では「主格」に立つ名詞は、「行為者」・「非行為者」に関して無規定であるから、対格に立つ名詞を主格に変換することは可能である。すなわち「受け身」が可能になるのは、この類型においてである。

§4 能格言語というのは、対格言語と活格言語の中間にある言語段階であると考えられ、その原理は行為者であるか否かであると思われる。したがってこの言語においてはシンタグマの形式は活格言語に等しい。生物・無生物のカテゴリーは、この言語では暗黙の前提とはなっているにせよ、もはや基本的な原理ではないから、動詞は活格言語の状態動詞のうちの生き物に関係するものも、行為動詞を主体とする、いわゆる「能格動詞」に対立する「絶対動詞」に移行し、対格言語の「自動詞」と「他動詞」の分類に近いものとなっているが、諸家の指摘するように、なお完全に自動・他動の分類には至っていないとみられる。たとえ自動詞であっても、たとえば移動の動詞 *verba movendi* など、生き物の基本的な行為を表すものは、未だ能格動詞に含まれているからである。

この言語も、「行為者」を表すものが有標的な格をとるから、「受け身」を作ることができない。

§5 いま、意味的に行為を他に及ぼす者をあらわすものを *A(ctor)*、そうでないものを *S(ubject)*、被行為者を *P(atient)* としてあらわせば、活格言語および能格言語は *S* と *P* と

が同じ無規定の絶対格を取り、 A が有標的な活格または能格を取るのに対し、対格言語では S と A とが主格の形を取り、 P のみが対格という有標的な格を取るということになる。

活格・能格言語	A	—	$S = P$
対格言語	$A = S$	—	P

ここからピボット pivot という、興味ある現象がみられることになる。角田 [2] によれば、英語の等位構文のばあい、

- a. Nancy(S) went and [Nancy(A)] slapped Diana(P).
 b. Nancy(A) slapped Diana(P) and [Nancy(S)] went away.

のばあい、後続の節および先行の節の Nancy は、 S と A または A と S であるから省略可能である。英語が対格言語に属し、したがって $S = A$ となるからである。これに対し、

- c. *Nancy(S) went and Charles(A) kicked [Nancy(P)].

は $A \neq P$ であるために省略すれば非文になる。

逆に活格あるいは能格類型に属する言語では、a. および b. の文の括弧の中を省略すれば非文になり、c. の文の省略のみが可能となる。

たとえば、能格型(活格型?)とされるオーストラリア東北部のワログ語では、次のような現象がみられるという。

- d. pama+ $\emptyset$ yani+ $\emptyset$ warrngu+ngku [pama+ $\emptyset$] palka+ lku.

「男・絶対格 行く・過/現 女・能格 [男・絶対格] 殴る・目的」=

「男(S)が行って、女(A)がその男(P)を殴った」(動詞の目的形は、従文において目的、結果、次に起こったことなどを表すという。)

- e. warrngu+ngku pama+ $\emptyset$ palka+n [pama+ $\emptyset$] yani+yal.

「女・能格 男・絶対格 殴る・過/現 [男・絶対格] 行く・目的」=

「女(A)が男(P)を殴って、その男(S)が行った」

これに対し、次の文は非文になる。

- f. *pama+ $\emptyset$ yani+ $\emptyset$ [pama+ngku] warrngu+ $\emptyset$ palka+ lku.

「男・絶対格 行く・過/現 [男・能格] 女・絶対格 殴る・目的」=

「男(S)が行って、男(A)が女(P)を殴った」[3, pp. 56-57]

3. ロシア語の類型学的特徴

§6 スラヴ諸語は、他の印欧諸語と同じく対格言語に属しているが、さまざまな点で対格言語に似た言語的特徴を呈していると思われる。そしてその中で最も徹底してこの特徴を取り入れているのがロシア語であると思われるのである。

たとえば

1. 名詞の活動体と不活動体の区別の導入
2. verba habendi иметь の使用の制限
3. 形容詞の短語尾形による述語性の強化
4. 連辞の廃用
5. 動詞の体の一般化
6. 動詞の人称変化の制限による主語との結びつきの弱化

これが先に述べたクリモフの仮定の b.、すなわち類型の発展が逆行することはないとする原則を否定するものではないにせよ、若干の問題を感じさせるところとなっていることは、否定できない。

4. 言語同盟

言語同盟 language union, Sprachbund, языковой союз というのは、一定の地域に長期間接触し、並存している言語が、異系言語であるか親近言語であるかにかかわらず、一定の構造的類似を獲得する現象を指す。最もよく知られたものは、いわゆるバルカン半島にある諸言語に関してである。ここには印欧語のうち、スラヴ語派に属するブルガリア語、セルビア語、クロアチア語、マケドニア語、ロマンス語派に所属するルーマニア語、イリュリア語派に属するギリシア語、独立した語派を構成するアルバニア語、フィン・ウゴル語族に属するマジャール語、チュルク語族に属するトルコ語などが主なものである。これらはたとえば後置冠詞の存在、属格と与格の融合、未来形が「欲する」を意味する動詞によって回説的に表現されること、不定法の欠如などの共通点をもっている (cf. [14])。このような言語同盟の研究は、地域言語学の一部をなすものであり、言語の融合の過程、すなわち「集約の相」convergence の研究であるといえる。この「集約の相」の研究は、「拡散の相」divergence の研究である比較言語学と比較して、未だ十分に科学的方法をもっていない。

II. 問題の所在

§7 スラヴ諸語、特にロシア語にみられる「逆行現象」が何故起こったのか、またそれが本当に逆行現象なのか、については、確たることはなにもわかってはいない。漠然といわゆる「基層」substratum の言語の影響ではないかといえぬのである。しかし類

型学の研究書には、たとえばプシュトーの言語に「能格的」な現象がみえる等の記述が見える。プシュトーの言語は印欧語のイラン諸語に属しており、そういう目でみれば、イラン諸語と近縁でこれと共にインド・イラン語派を構成するインド諸語に属するたとえばサンスクリット語にも似た現象があるといえる。一方インド・イラン語派はスラヴ語派と同じくいわゆるサテム語群に所属しており、サテム語群とセントウム語群とは印欧祖語の末期に既に存在していた方言的差異を反映するものであるとする説を為す研究者もいる。このことから、スラヴ語にみえる現象が、このようなサテム語群に共通するものかどうかを、検証する必要があると思われる。もしもあるとすれば、このような「逆行現象」はサテム語群という方言的差異をもたらした基層言語と関係づけられるかもしれないからである。セメレニィはヤコブソンが「言語同盟」の概念を初めて提示した事をあげながら、彼がポーランドから蒙古に至るユーラシア言語同盟 *Eurasischer Sprachbund* を考えており、その特徴としてモノトニー *monotony*、子音の硬・軟の対立を挙げていることを紹介している (cf. [8, p. 79][4, p. 235])。

もちろん筆者はこれらの言語に知識がなく、このための研究は専門家にゆだねなければならないが、若干の解説書をひもとくことによって、その可能性が全くないかどうかを見てみたいというのが、本報告の趣旨である。

サテム語群

印欧祖語の破裂音の中の喉音に属するものが、言語によって喉音の特徴を残す音に変化するばあいと、S類の摩擦音に変化するばあいがある。印欧祖語の「百」を意味する **k₁mtō-* に対応するラテン語の *centum* とアヴェスタの *satəm* をとって、前者をセントウム語群、後者をサテム (またはサタム) 語群という。念のために対応表を示せば、次のようになる。

I.-E.	Hitt.	Tokh.	Skr.	Av.	O.Sl.	Lit.	Arm.	Gr.	Lat.	Irl.	Got.
*k ₁	k	k(ç)	ç	s	s	š	s	κ	c	c	h(g)
*g ₁ h	k(g)	k	h	z	z	ž	j(z)	χ	h	g	g
*g	k	k	j	z	z	ž	c	γ	g	g	k

たとえば、

k₁:

Skr. *çravaḥ* 「名声」, Gr. *κλέFος*, O.Irl. *clū*, Lat. *cluar* 「評判」,

Av. *sravah* 「言葉」, O.Sl. *slovo* 「言葉」;

g₁h:

Skr. *vahati* 「乗り物で行く」, Av. *vazaiti*, O.Sl. *vezetŭ*, Lit. *vėža*,

Lat. *vehit*;

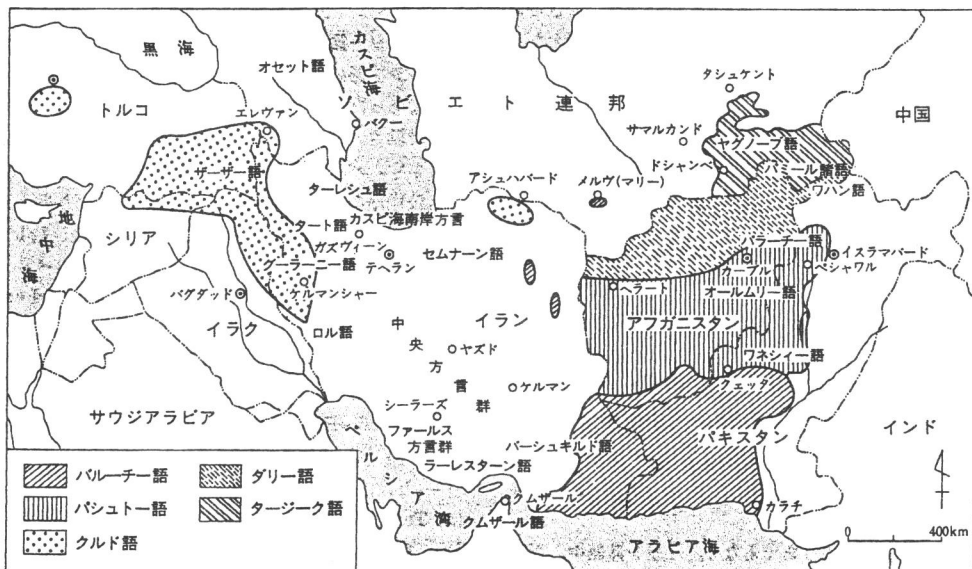
g:

Skr. *janah* 「種族」, Arm. *cin* 「生まれ」, Gr. *γένος*, Lat. *genus*;

§8 これらのサテム語群の中、インド・イラン語派は、スラヴ語族の居住地の東方に隣接して、イラン諸語を介してインドに至る広大な土地を占めている。このことからスラヴ語とインド・イラン語派の諸言語とが、一つの言語同盟を形作っていた時期のあることが予想される。

イラン語派とインド語派の分布は添付の地図にみえるようであるといわれる。

〈図〉 近代イラン語の分布



- 注：1) 小言語あるいは方言の話者は、男性のときにはその大半が、共通語との二重言語使用者である。共通語とは、イランの場合にはペルシア語であり、アフガニスタンの場合にはダリー語がこれに相当する。
 2) イラン全域で話されているペルシア語については、特にその地域を示していない。
 3) 地図上の余白の関係で、本文中の言語名がすべて示されているわけではない。

三省堂『言語学大辞典』第1巻 p. 681 より引用

さて、古典サンスクリットには、周知のように、*evam mayā śrutam*. 「このように私によって(具格)聞かれた(中性・単数)」のように、*-to- による構成にかかる、いわゆる被動形動詞過去を定動詞のように用いる構文がみられる。これは見方によれば、さきに述べた「逆行現象」とも考えられる。サテム諸語を調べてみようと思った発端は実はこの構文にあったのである。しかしこれらの諸言語は、若干の主な言語を除いてはいまだ十分に研究されているとはいえず、今後の解明が俟たれるところである。

まずイラン語派で最も著名なのは、アヴェスタ語と古代ペルシア語である。アヴェスタ語はゾロアスター教の聖典ガーサー *gāthā* (詩編) が記された言語であり、伝存しているも

のはササン朝ペルシア (226–651 A.D.) の中期以後に考案されたアヴェスタ文字によって固定されたものといわれ、現存している写本は13世紀末以降である。しかしアヴェスタ語はヴェーダの言語と並んで印欧語の古形をよく保存し、その関係が未だ極めて透明であるといえる。

これに対し透明度という点では、これに劣らないが、古代ペルシア語は、完了時制でサンスクリットと同じ用法を示している。たとえば

ima tya manā kartam Bābirauv.

「これが (that) こと (what) 私の 為された バビロンで」 = 「これがバビロンで私の為した ことである」

のようになる。ここで *manā* は属・与格であり、*kartam* は中性形の主・対格であって、*tya* を形式上の主語としている。したがってこれは極めて忠実な印欧語的統語法を踏襲しているといえるが、見方によれば述語部分の *kartam* が目的語 *tya* と文法的に一致しており、*manā* が行為者を表す格であるとも考えることも、決して不可能ではない。

同様の例を挙げれば、

avaišām avaθā naiy astiy kartam yaθā manā vašnā Auramazdāha hamahyāyā θarda kartam.

彼ら (*avaišām* G.D.) そんなに (*avaθā*) 否定 (*naiy*) 連辞 (*astiy* 3sg./pl.) 為された (*kartam* neut./masc.nom./acc.) それだけ (*yaθā* 関係副詞) 私 (*manā* G.D.) 意志 (*vašnā* G.D.) アフラマズダの (*Auramazdāha* G.D.) 一年で (*hamahyāyā θarda*) 為された (*kartam* neut./masc. nom./acc.) = アフラマズダ (光明神) の意志によって一年で私が行ったほどのことを、私はしなかった。(cf. [15, I. p. 183])

§9 この構文は中世ペルシア語にわずかの修正を伴って受け継がれるが、その本質に関しては大きい変化が生じたと考えられる。すなわち、自動詞の場合は *-ta* の構成にかかる被動形動詞につく連辞 (< *ah- < *es-) が主語と一致し、能動として用いられるようになり、また他動詞の場合、*-ta* の形に加えられる代名詞的後倚辞が意味上の主語を表すようになって、連辞は目的語と一致するようになったのである。この形は、代名詞が未だ独立してはいたが、上述したように、すでに古代ペルシア語に見られていた。たとえば、

自動詞:

raft ham/hēm.

立ち去った 連辞 (1sg./pl.) = 私は/私たちは 立ち去った。

他動詞:

maiy kartam astiy.

私 (D.G. 後倚辞) 為された 連辞 (3sg.) = 私は (それを) 為した。

中世ペルシア語では、たとえば、

自動詞:

hač kū mat ham? = から どこ 来た 連辞(1sg.)

= 私はどこから来たのか。

他動詞:

ān x^uamn i-m dīt = その 夢 それ-接辞(1sg.) 見られた=

私が見たその夢(cf. [15, I. p. 184])。

このようなことが起こったのは、-ta に終わる被動形動詞が修飾語として立つときには、*-ka によって延長された形 -tak < *-ta-ka が一般化し、これに伴って -ta の形が修飾語として用いられなくなり、結果としてこれが動詞の過去形と考えられるようになったことと関連していると考えられている(cf. [15, I. pp. 200–201])。このことは、このいわゆる「能格構文」が、イラン諸語が対格言語に発展する以前に存在していたものの残滓ではなく、対格言語の内部において新たに発展したものであることを示している。

§10 イラン語派のばあい、この種の疑似能格構文が広く一般化しているように思われる。たとえばクルマンジ語 Kurmandži のばあい、名詞は直格 casus rectus と一般斜格 casus obliquus および呼格を区別するが、直格は自動詞構文の主語、他動詞構文の目的語を表すとされる。そして動詞は常に直格と文法的に一致するとされる。すなわち、

mevan ču. = guest(s)(direct.case) went-off (aor.sg.)

(一人の)客が去った。

mevan čun. = guest(s)(direct.case) went-off (aor.pl.)

(複数の)客が去った。

に対して、

mən kəteb kəri = I (obl.case) book(s)(direct.case) bought (aor.sg.)

私は(一冊の)本を買った。

mən kəteb kərin = I book(s)(direct.case) bought (aor.pl.)

私は(複数の)本を買った。cf. [15, I. p. 144]

またベルジ語 Berudž のばあいは、たとえば、

mā čiār gurx diθ-ant = 私(obl.) 四 狼(rec.) 見られた-連辞(3pl.) = 私は四匹の狼を見た。

ここで連辞は目的語の狼と一致している。

またプシュトゥー語 Pushtu のばあいは、たとえば、

tā zə lid-ələm = きみ(obl.) 私(rec.) 見られた-連辞(1sg.) = きみは私を見た。

しかし、ベルジ語 Berudž を話すもののうちでも、ソヴェトあるいはアフガンに居住し

ているものは、接辞部分が主語と一致するようになった。これは自動詞構文との類推によるものとされているようであるが (cf. [15, I. p. 207])、ロシア語の影響があるかも知れない。たとえば、

自動詞:

ešān šūt-ant = 彼ら 行かれた-連辞 (3pl.) = 彼らは行った。

他動詞:

ešān kúrt-ant = 彼ら 為された-連辞 (3pl.) = 彼らは為した。

現代ペルシア語、タヂク語、タト語 Tātī、ギリヤン語なども、同じ発展を辿ったとされる。

ラストルグーエヴァ等ソヴェトの研究者たちは、このような構文を「能格構文」とよんでいるが、この構文の述語となった被動形動詞部分は、本来直格に立つものと文法的一致をしていたのであるから、これをもって真正な能格構文とみなすことはむずかしいように思われる。これが本来の対格言語に較べて、世界の観方の相違を示すものではないと思われるからである。この意味でこれらは「疑似能格・活格構文」でしかないと思われる。

§11 またアフガニスタン・ヌリスタンの北東部の山岳地帯、パキスタンの北部、ならびにインドの北西部に存在する言語として、いわゆるダルド Dard 諸語がある。この言語の帰属については諸説があり、たとえばショウは、これらの言語はインド・イラン語派が未だ未分化であった状態から直接に来由したものであって、イラン語派にもインド語派にも属さない、中間的な性格を有すると説く (cf. [7, p. 147] [17, p. 7])。

これに対してコノウはこれら、とくに下位方言群のカフィール諸語を、イラン語派に帰属せしめるが、分岐の基盤となったイラン祖語には既に方言分化が存していた可能性をも、否定していないという (cf. [5, pp. 2-7] [17, p. 7])。

いずれにせよ、この語群はカフィール語群ともいわれる西方群、中央群及び東方群に大別される。この最後の東方群が本来のダルド語群といわれているものである。

いわゆる「能格構文」は、大部分の言語にみられるが、その現れ方は一様ではないとされる。しかし大部分は自動詞の現在形と過去形、他動詞の現在形は、無標の主格ないし直格が意味上の主語に立ち、有標的な斜格が他動詞の過去形と共に用いられて意味上の主語を表すという点で、共通しているといえる。

たとえば西方群に属するヴァイガリ語 Vaygali では、自動詞のばあい、

a. guṛā yūs yāai = 馬 (rect.) 草 (rect.) 食べる (pres.3sg.)

= 馬が草を食べる。

b. ali manaš matrēi = その人 (rect.) 言った (past 3sg.)

= その人が言った。

ここで *yūs* 「草」は種類を表す、不定性をもつ語である。このようなばあいには、直格が目的語としても用いられる。これに対して他動詞のばあい、

c. *ali manašā wātoi* = この人 (obl.) 見た (past 3sg.)
= この人が見た。

d. *yē winesta wrem* = 彼ら (obl.) 打つ 連辞 (1sg.)
= 彼らが私を打った。

d. のばあい、連辞は1人称単数であって、目的語と文法的に一致している (cf. [17, pp. 40–43])。この言語では「打つ」等の動詞部分には **-to-* の構成にかかるもののほか、**-no-* の構成にかかるものも使用され、スラヴ語の被動形動詞と平行した現象を呈する。序に言えば、目的語が定性を示すときには、斜格が用いられる。たとえば、

e. *gurfo grātilom* = 馬 (obl.) 縛り付ける (fut.1.sg.)
= 私は馬を縛り付けよう。

§12 興味のあるのは、たとえばいま述べたヴァイガリ語において、形容詞が修飾語として用いられるばあいの外に、接尾辞 *-st(ä)*, *-št(ä)* の構成にかかる、述語としてのみ用いられる形式のあることである。たとえば

a. *tapik āw* = 水 熱い = 熱い水
brā ōlu wrem = 兄弟 (rect.) 大きい 連辞 (3sg.) = 兄弟は大きい。

b. *amā ōlāst-ō* = 家 (rect.) 大きい-(3sg.) = 家は大きい。

ここで述語形が接尾辞によって形成されていること、および連辞をその中に融合させていることに注意する必要がある。これは述語形が二次的な派生であって、かつ動詞的性格を強めていることを示すものと考えられ、スラヴ語の短語尾形の形成と平行する現象であると思われる (cf. [17, p. 43])。序ながらこの言語において形容詞が接尾辞 *-ok/g* を取るにより、指小辞を作ることが指摘されているのは興味深い。たとえば, *atal-(ašt)og* 「小さい+指小辞」、*tawr-əstək* 「短い+指小辞」のようなばあいである。

このような形容詞の述語形は、カーティー語 *Kātī*、アシュクン語 *Ashukun* にもみられ、他のイラン諸語ではたとえばベルブジ語 *Belubuj* にも存在するとされる (cf. [17, p. 28])。たとえばカーティー語では述語形は接尾辞 *-ste* によって構成される。

d. *ev lē manje* = 一 良い 男 = 一人の良い男

e. *lē-ste* = 良い-接尾辞 = (彼は) 良い

アシュクン語でも同じように接尾辞 *-stä* (*-stə*, *-stə*) によって形容詞の述語形が作られる。たとえば *kāra* — *kāriste* 「盲目の」など (cf. [17, p. 56])。

§13 このほか、東方群に属するカシミール語 *Kashmīri* のばあいには、活動体と不活動体の区別がある。これはこの言語に直格、二つの斜格の外、特別の行為者格があることと関係があるのかも知れない。このカテゴリーは、名詞の変化形式にさまざまに現れるというが、詳細については今のところ不明である。しかし代名詞のばあいには、指示代名詞、3人称代名詞、疑問代名詞、関係代名詞などの単数に明確な形で現れている。いまこれを疑問代名詞 *kus* 「誰」、および *kyah* 「何」についてみれば、次のようになる (cf. [17, p. 183])。

格	単 数		複 数
直格	活動体	不活動体	
	<i>kus</i> (masc.) <i>kōssa</i> (fem.)	<i>kyah</i>	<i>kam</i> (masc.) <i>kama</i> (fem.)
斜格 I	<i>kamis</i> , <i>kas</i>	<i>kath</i>	<i>kaman</i>
斜格 II	<i>kami</i> , <i>kawa</i>	<i>kami</i> , <i>kawa</i>	<i>kaman</i>
行為者格	<i>kamⁱ</i>	<i>kamⁱ</i>	

§14 次にイラン語派の西方群に特に一般化されている現象として、いわゆる *Izafet* 構文という特異な構文がある。ペルシア語をはじめとしてタジク語、クルド語、及びこれと親近なアヴロマニ *Avromani*、ザザ *Zaza*、ギリヤン *Gilyan*、カシヤン諸方言等がこれに属するという。南イランではパラチ語 *Parachi*、また東イランに属するものには、ヤズグリヤム語 *Yazugulyam*、イシュカシム語 *Ishkashim*、ヴァハン語 *Vakhan* などがあるという (cf. [15, I. pp. 168 & seq.])。

この構文は次の二つの条件によって特徴づけられる。すなわち、

1. 修飾語が被修飾語に後置される。
2. 結合要素が被修飾語に付加される。

たとえば、

Pers. *āsp-e sefid* = 馬-Izaf. 白い = 白い馬

Tadzik *kitób-i xub* = 本-Izaf. よい = 良い本

Kurm. *kāvér-e mázæn* = 石-Izaf. 大きい = 大きい石

Gilyan *ādém-ə təbdār* = 人-Izaf. 病気の = 病気の人

これはさらに連鎖的に用いられることもある (*Izafet chain*)。たとえば、

Pers. divār-e seffid-e bolānd = 壁-Izaf. 白い-Izaf. 高い = 高い白い壁

この構文の萌芽は、古代ペルシア語の楔形文字による碑文にみられ、まれにアヴェスタにみえる関係代名詞によるものと考えられている (cf. [15, I. pp. 167 & seq.]). すなわち、

O.Pers.	hya	masc.	Av.	ya	masc.
	hyā	fem.		yā	fem.
	tya	neut.			

たとえば、

kāra-hya hamīqiya = 軍隊-関係詞 反抗的な (nom.sg.masc.) = 反抗的な軍隊

このような Izafet 構文の発達は、形容詞の述語的性格がまだ完全には失われていないことをうかがわせる。そういう見方からすれば、ここに能格言語ではなくて活格言語的な現象を見ることになるかも知れない。

III. 結 語

このほか以上述べた諸言語の極めて多くのものが、動詞のアスペクトの組織を発達させていることが目につく。これについては統語論を含めた十分な研究が今後為されるべきであろうと思われる。ここでは立ち入って述べることをしないが、これもまたスラヴ諸語のばあいと平行した現象と考えることができる。しかしインド諸語もまたイラン諸語も、記述が未だ不完全で、十分に依拠するに足るものが見出せないのが現状である。今後の研究の発展を俟つしかないとはいえ、サテム語群のもつ特殊な現象で、ロシア語の示す特異性に矛盾するものは、少なくとも現在のところなかったといえる。所詮状況証拠にすぎないとはいえ、スラヴ諸語がサテム語群と共に言語同盟をつくっていた可能性も、管見の限りなお完全には否定されていないと考えるべきであろう。

関係文献

- [1] 『言語学大辞典』
亀井 孝、河野六郎、千野 栄一 edd. 三省堂、全6巻、1989.
- [2] 角田 太作
能格言語と対格言語におけるトピック性『言語研究』 vol. 90, 1986, p. 149 & seq.
- [3] 山口 巖
『類型学序説』、京都大学学術出版会、1995.
- [4] Jakobson, Roman,
Über die phonologischen Sprachbünde, *Réunion phonologique internationale tenue à Prague, Travaux du Cercle Linguistique de Prague*, vol. 4, Prague, 1931, pp. 234-240.
- [5] Konow, Sten,
Notes on the classification of Basghali, *Journal of the Royal Asiatic Society of Great Britain and Ireland*, London, 1911, January.
- [6] Meillet, Antoine,
Introduction à l'étude comparative des langues indoeuropéennes, 8^{me} éd., Paris, 1937.
- [7] Shaw, R. B.,
On the Ghalchah languages (Wakhi and Sarikoli), *Journal of the Asiatic Society of Bengal*, vol. XLV, no. 2, Calcutta, 1876.
- [8] Szemerényi, Oswald,
Richtungen der modernen Sprachwissenschaft, Teil I: Von Saussure bis Bloomfield 1916-1950. Heidelberg, 1971.
- [9] Trubetzkoy, N. S.,
Phonologie und Sprachgeography, *Réunion phonologique internationale tenue à Prague, Travaux du Cercle Linguistique de Prague*, vol. 4, Prague, 1931, pp. 228-234.
- [10] Климов, Георгий Андреевич,
Очерк общей теории эргативности, Москва, 1973.
- [11] Климов, Георгий Андреевич,
Типология активного строя, Москва, 1977.
- [12] Климов, Георгий Андреевич,
Типологические исследования в СССР. 20-40-е годы, Москва, 1981.

- [13] Климов, Георгий Андреевич,
Принципы контенсивной типологии, Москва, 1983.
- [14] Ярцева, Б. Н. et alii, edd.
Лингвистический энциклопедический словарь, Москва, 1990.
- [15] Расторгуева, В. С., Эдельман, Д. И., edd.
Опыт историко-типологического исследования иранских языков в двух томах, vol. 1. Фонология, Эволюция морфологического типа; vol. 2. Эволюция грамматических категорий, Москва, 1975.
- [16] Трубецкой, Н. С.,
Виноградов, В. И., Нерознак В. П. edd., *Избранные труды по филологии*,
Москва, 1987.
- [17] Эдельман, Джой Иосифовна,
Дардские языки, Москва, 1965.